

サステナブル漁業プロジェクト報告書: 千葉県船橋市東京湾スズキまき網漁業 (2025年11月報告)

評価対象地域

クライアントが漁業を行なっている東京湾とする(図1)。



図1. 東京湾地図.

漁業情報

対象魚種	第1漁獲対象種:スズキ (<i>Lateolabrax japonicus</i>) 第2漁獲対象種:コノシロ (<i>Konosirus punctatus</i>)
漁場	東京湾内
漁具	中型まき網漁業(知事許可)
参加者	海光物産株式会社 株式会社大傳丸 有限会社中仙丸

公的管理目標	<p>千葉県資源管理方針(令和7年10月公表)¹</p> <p>【スズキ】 中位以上の資源水準(小型機船底びき網漁業のCPUEで3.8kg/網を上回る資源水準)を維持する</p> <p>【コノシロ】 千葉県沿岸水産資源の資源評価において判断される中位以上の資源水準(漁獲量で643t/年を上回る資源水準)を維持する</p>
公的管理方法	<p>千葉県における船橋市漁業協同組合の資源管理協定²</p> <p>【スズキ・コノシロまき網漁業】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 休漁期間の設定(中型まき網漁業:2月) 2. 週1回の休漁日の設定 <p>国としての管理体制</p> <p>【スズキ・コノシロ】 漁業法改正に伴い資源評価対象魚種に指定されているが、現時点では国レベルの管理制度はまだ整備されていない。水産研究教育機構(FRA)による資源評価も調査段階にある。そのため、都県による沿岸漁業規則と、該当漁業による自主的な管理措置が中心となっている。</p>
自主的管理方法	<p>【スズキ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 抱卵・産卵期のスズキ類の漁獲を避けるため、11月末から翌年2月末まで漁獲の制限 ● 休漁期の設定:例年2月 ● サイズ制限:小セイゴ(25cm未満)・700g以下は年間を通じてできるだけ放流する。 <p>【コノシロ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 網のかけ方を調整して漁獲量を調整している ● 産卵・成育場である湾奥(特に船橋港、市川港、千葉港といった航路内)での漁獲を自粛する。 ● 抱卵、産卵期(例年4月16日～5月末)のコノシロの漁獲を可能な限り自粛する。 <p>※市況を鑑みてコハダが混獲した場合は、この限りではない。</p> <p>【共通】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 投網毎の漁獲データ(漁種別漁獲量、開始時間、緯度経度など)を電子的に記録 ● 絶滅危惧・保護種が混獲した場合、その日時と場所、状況、対応を記録し、できるだけ生きた状態で放流する。 ● 稚仔魚の生育場保全のため、アマモ場での操業を控える。 ● 漁具が着底することでの海底生態系への影響を図るために、着底時の日時、漁具の状況(破損・紛失)、付着物を記録する。

¹ [千葉県資源管理方針](#)

² [千葉県における船橋市漁業協同組合の資源管理協定](#)

これまでの活動

- 2016年～現在：持続可能な漁業を目指した漁業改善活動を実施し、漁獲量などの記録を開始した。
- 2019年：UMITO Partners社内の科学者が分析したデータを基に資源動態モデルを用いてスズキの資源評価を行った。
- 2020年3月～現在：電子記録モニタリングを導入し、魚種毎の漁獲量、放流量、漁具の着底の記録を開始した。
- 2022年7月：マリンエコラベル認証（漁業認証規格Ver.2.0）を取得した。
- 2023年12月～現在：千葉県と標本船契約を締結（～2024年3月まで）、本プロジェクトを通じて電子的に記録される漁獲情報を千葉県資源評価の正式なデータとして活用している。

最新活動報告

2024年5月～2025年4月（12ヶ月）のデータを分析した結果は以下の通りである。

漁獲の割合

前年と同様に、1年を通じた操業ではコノシロおよびスズキが全漁獲量の大部分を占めていた。大傳丸・中仙丸の両船を合わせた全漁獲量は1,935.5トンであり、そのうちコノシロが847.7トン（86.2%）、スズキが104.8トン（10.7%）を占めた。その他、総漁獲量の0.5%以上を占める魚種はクロダイ（0.6%、5.8トン）、シログチ（0.7%、6.9トン）、タチウオ（0.5%、5.4トン）であった。

大傳丸では総漁獲量998.3トンのうち、コノシロが433トン、スズキが55.5トンであり、中仙丸では総漁獲量937.2トンのうち、コノシロが414.7トン、スズキが49.3トンであった。いずれの船においても、コノシロが漁獲の中心となっている。

スズキのサイズ別漁獲を見ると、ほとんどが1.2kg以上のスズキサイズであり、両船合計で104.7トンを占めた。セイゴサイズ（700g～1.2kg）はわずか0.1トンにとどまっており、全体の1%未満であった。大傳丸ではセイゴ0.1トン、フッコ55.4トン、中仙丸ではセイゴ0トン、フッコ49.3トンであった。

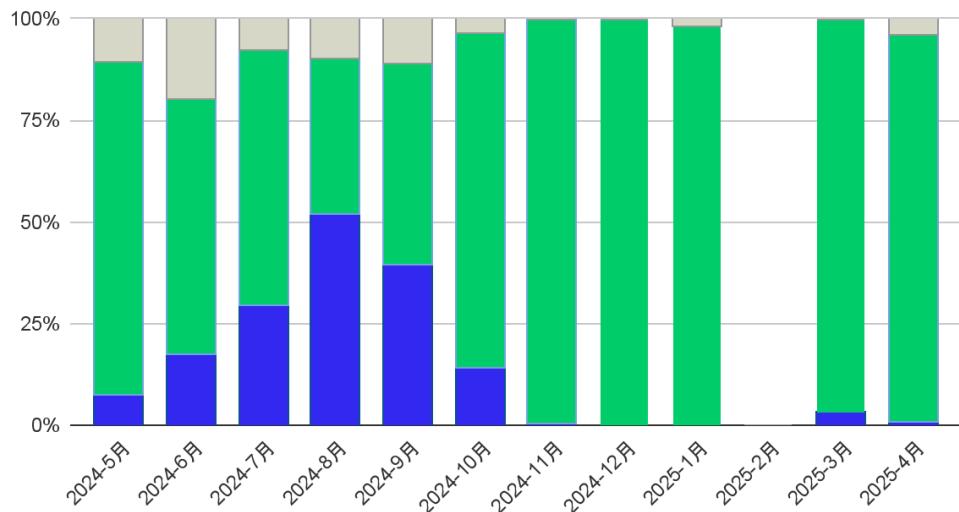
コノシロについては、成長段階別の漁獲割合ではコノシロサイズが772.1トンと最も多く、次いでコハダサイズが74.7トン、シンコサイズが0.9トンであった。大傳丸ではシンコ0.3トン、コハダ58.6トン、コノシロ374.2トン、中仙丸ではシンコ0.6トン、コハダ16.1トン、コノシロ397.9トンであった。

スズキの漁獲は前年と同様、抱卵期・産卵期とされる11月中旬～1月末にかけて著しく少なく、2月は禁漁のため漁獲量は0であった。この期間における月別のスズキ漁獲割合（総量）は平均1%以下であり、両船において自主的管理ガイドラインが引き続き遵守されていることが確認できた（図2参照）。

スズキ・コノシロ以外に漁獲されるその他に含まれる魚種（漁獲量）は、シログチ（6.9t）、クロダイ（5.8t）、タチウオ（5.4t）、ボラ（4.3t）、マイワシ（2.5t）、サワラ（2.3t）、キチヌ（1.5t）、アカカマス、マアジ、ギマ、サッパ、サヨリ、マルアジ（いずれも1t未満）、トラフグ、ブリ、コ

ショウダイ、ホウボウ、マダイ(いずれも0.1t未満)だった。

大傳丸 魚種ごとの漁獲割合



大傳丸の月ごとの漁獲物の漁獲量

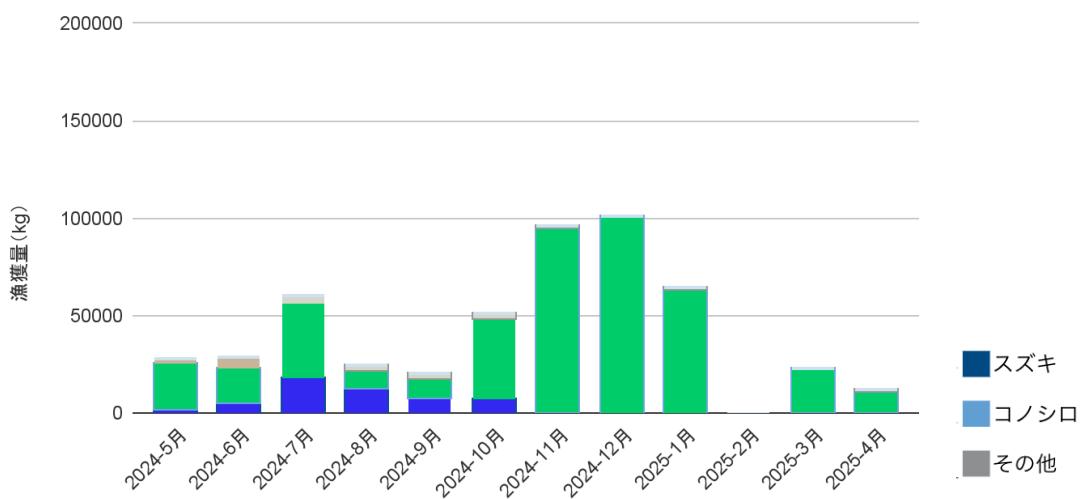
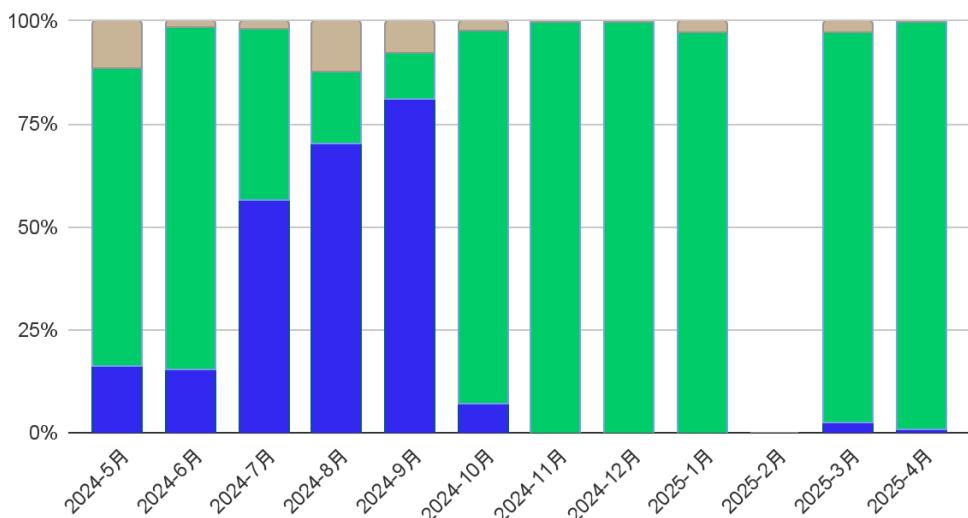


図2. 大傳丸による月毎の漁獲物の割合(上)と漁獲量(下)

中仙丸 魚種ごとの漁獲割合



中仙丸の月ごとの漁獲物の漁獲量

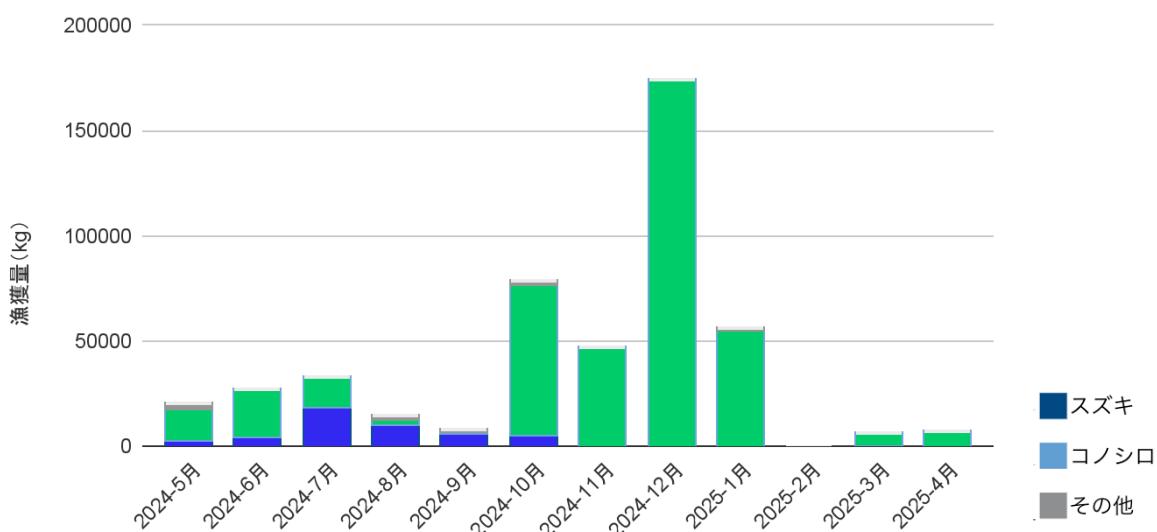


図3. 中仙丸による月毎の漁獲物の割合(上)と漁獲量(下)

主な漁獲物の資源状態

令和6年度における千葉県の沿岸水産資源評価結果(別紙1、別紙2)によれば、スズキ及びコノシロの資源状態は以下のとおりである。

- ・ スズキ(東京湾域): 資源水準「中位」、資源動向「横ばい」³
- ・ コノシロ(東京湾域): 資源水準「高位」、資源動向「増加」⁴

これまで(令和5年度)には、スズキ・コノシロとともに同県資源管理方針に記載された資源水準を上回る評価がなされていたが、今回スズキにおいては評価水準が「中位」に下がり、動向も「横ばい」となったため、資源管理方針上の目標を維持できていない可能性がある。一方、コノ

³ [千葉県沿岸重要水産資源 令和6年度資源評価－スズキ\(東京湾\)](#)

⁴ [千葉県沿岸重要水産資源 令和6年度資源評価－コノシロ\(東京湾\)](#)

シロは引き続き「高位／増加」と好調であり、管理目標を引き続き満たしている。^{5,6}

水産研究・教育機構(FRA)では、沿岸性魚種の資源評価体制を整備するため、各地の漁獲統計や標本調査データの収集・整理を進めている。「令和6(2024)年度 資源評価調査状況報告書(拡大種)」^{7,8}では、スズキおよびコノシロも対象魚種として位置付けられ、漁獲量、年齢構成、調査地点、使用データの概要などが整理されている。

これらの取組は、これまで県単位で行われてきた資源評価を国レベルで補完・統合していくための基礎的作業にあたり、将来的な全国的資源評価の実施に向けた準備段階と位置付けられる。

漁獲対象種の仔魚・親魚および不要漁獲物の放流

スズキ類については、仔魚段階のセイゴを含む放流が引き続き実施されている。最新の記録では、スズキの放流が32回で計6,362kg、セイゴの放流が11回で計2,940kg、フッコの放流が5回で計245kgとなっており、いずれも成長段階に応じて適切に選別・放流が行われている。これらの対応は、抱卵期前後における資源保全や漁獲調整の観点から、従来より継続的に実施されている取り組みである。

コノシロについても、抱卵期(4月中旬～5月末)の親魚漁獲を抑制する取組が継続されており、当該期間を含む全体でコノシロの放流は24回、計18,560kg、コハダサイズ14回で計23,100kg、シンコサイズ1回で300kgが放流された。前年までと同様に、産卵親魚への影響を抑える自主的な対応が確認されている。

不要漁獲物(混獲種)については、アカエイ、ドチザメ、トビエイ、ボラなどが主に確認され、いずれも100%放流されている。放流回数は、アカエイ27回、ドチザメ6回、オナガザメは2回、シュモクザメ類は1回、トビエイ6回、ボラ12回であった。これらの混獲個体は生存確認のうえ、即時放流が徹底されている。

絶滅危惧種・保護種への対応

東京湾内で操業するまき網漁船では、ドチザメ、ホシザメ、オナガザメ、シュモクザメ類など、国際自然保護連合(IUCN)のレッドリストに掲載されている絶滅危惧種が混獲される可能性がある。これらのうち、ドチザメおよびホシザメは「絶滅危惧IB類(EN)」、オナガザメは「絶滅危惧II類(VU)」に分類されている。また、今回混獲・放流が確認されたシュモクザメ類は、アカシュモクザメである可能性があり、本種は「絶滅危惧IA類(CR)」としてリストに掲載されている。さらに、アカエイは「近危急種(NT)」として準絶滅危惧種に位置付けられている。⁹

最新の漁獲・放流記録によると、ドチザメは6回、オナガザメは2回、シュモクザメ類は1回、トビエイは6回、アカエイは27回の放流が確認された。いずれの種も生存確認後に即時放流が実施されており、漁業者による適切な対応が継続されている。混獲の発生頻度は低く、対

⁵ 令和6年度千葉県における「すずき東京湾海域」に係る資源管理協定の取り組みの効果の検証結果(中間)

⁶ 令和6年度千葉県における「このしろ東京湾海域」に係る資源管理協定の取組の効果の検証結果(中間)

⁷ 令和6(2024)年度資源評価調査状況報告書スズキ太平洋中・南部

⁸ 令和6(2024)年度資源評価調査状況報告書コノシロ

⁹ The IUCN Red List of Threatened Species. Version 2025-2

象魚種への影響は限定的と考えられるが、引き続きIUCNレッドリスト掲載種への配慮が求められる。

なお、サメ類・エイ類の放流については、現時点では大傳丸の記録のみが整理されており、中仙丸ではスズキおよびコノシロの放流のみが記録されている。今後は、両船においてサメ類・エイ類等の混獲・放流に関する記録体制を整備し、情報を統一的に管理していくことが望ましい。

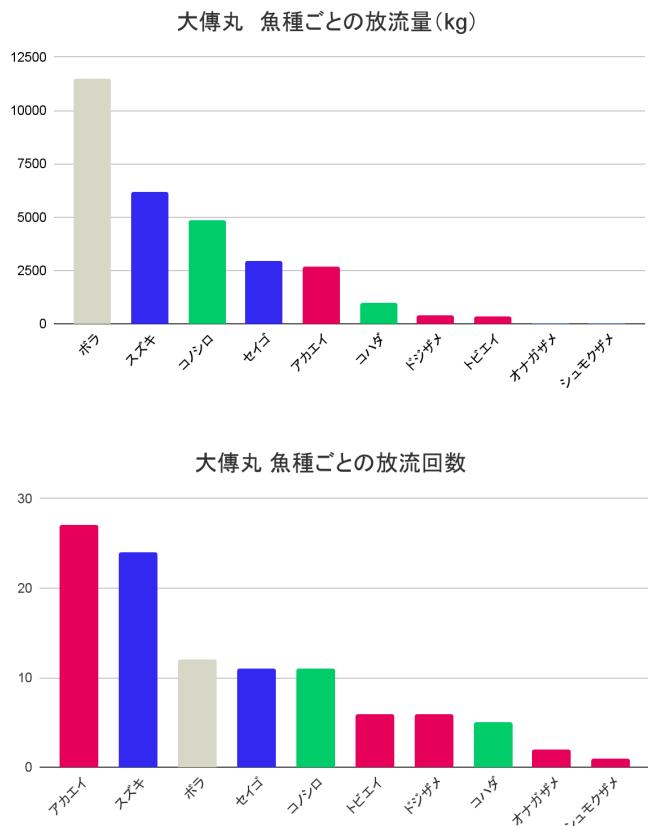
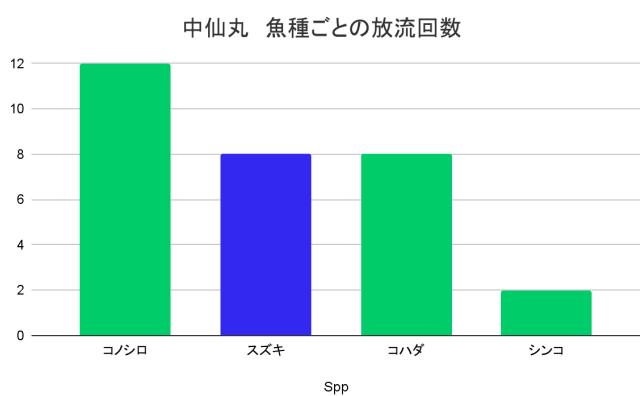


図4. 大傳丸によって放流された主要魚種(上)と魚種別放流回数(下)



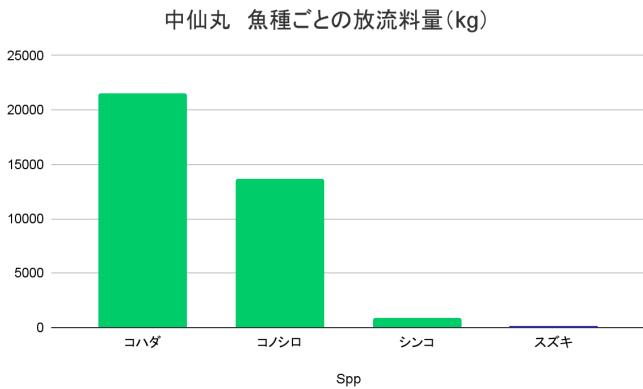


図5. 中仙丸によって放流された主要魚種(上)と魚種別放流回数(下)

漁具の破損や海底への接触

網に海底由来の付着物が確認された場合、着底(網が海底に接触)したものとして記録している。最新の記録によると、2024年の投網回数は合計701回(大傳丸379回、中仙丸329回)であり、そのうち着底が確認されたのは13回(大傳丸12回、中仙丸1回)であった。投網あたりの着底割合は全体で1.85%、大傳丸で3.17%、中仙丸で0.30%と、いずれも低い水準で推移している。

網の損傷は全体で31回(大傳丸28回、中仙丸3回)確認され、そのうち着底を伴う損傷は7回(大傳丸6回、中仙丸1回)であった。投網あたりの網損傷発生率は全体で4.42%、大傳丸7.39%、中仙丸0.91%であり、特に大傳丸でやや高い傾向がみられた。ただし、両船で記録方法に差異がある可能性があり、数値の単純比較には注意が必要である。

網に付着した物質の多く(79~92%)は泥やガラであり、岩盤や大型構造物の引き揚げは確認されていない。したがって、海底構造への物理的な影響は限定的であると考えられる。なお、漁場の多くは砂質または泥質底で構成されており、岩場は少ないとから、網が切断・損失するリスクの高い場所は避けて操業が行われている。

大傳丸の着底時の付着物の内訳

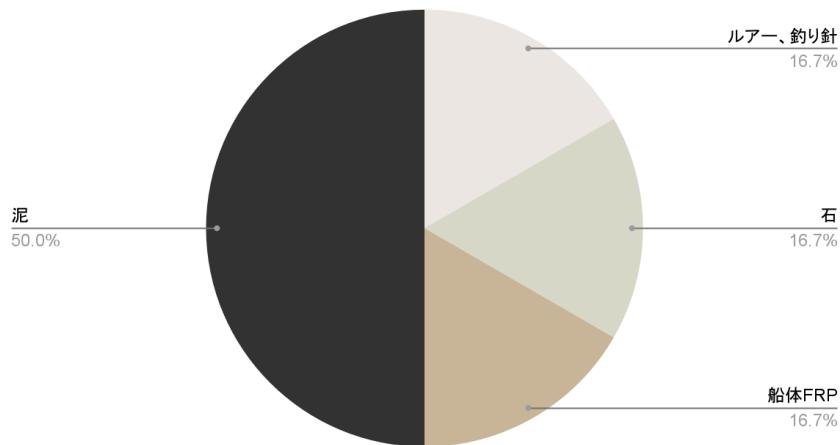


図5: 大傳丸と中仙丸の着底時の付着物

スズキの漁獲努力量当たり漁獲量(CPUE)の推移

2020年3月から2025年4月までの期間について、大傳丸および中仙丸の両船のデータを用いてスズキのCPUE(漁獲努力量当たり漁獲量、kg/網)を算出した。図5は月別および年別の平均CPUE値を示している。

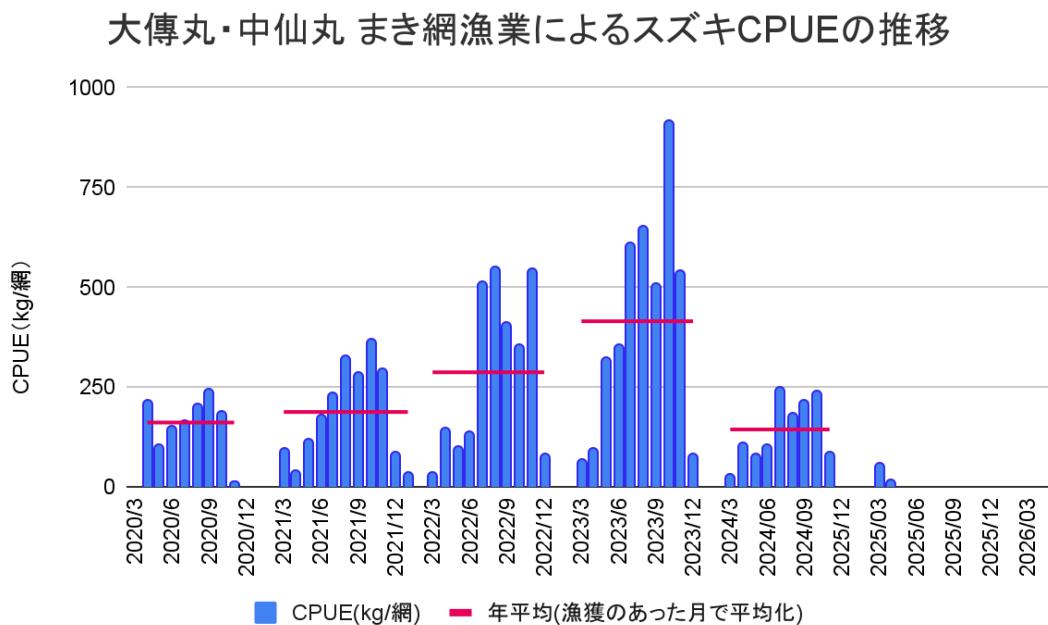


図5. 大傳丸と中仙丸による月毎の平均CPUE値(kg/網)と年平均CPUE値

約5年間のデータによると、スズキの月別平均CPUEは漁期後半の秋季(9~10月)に高い値を示す傾向がみられ、2024年9月に214.3 kg/網、10月に239.3 kg/網と比較的高かった。過去のピークでは、2023年10月に913.9 kg/網、2022年11月に543.5 kg/網を記録しており、秋季に漁獲効率が顕著に高まる傾向が一貫して確認されている。

年平均CPUEは、2020年161.4 kg/網、2021年187.8 kg/網、2022年287.3 kg/網、2023年415.2 kg/網、2024年144.2 kg/網であった。2024年はスズキ漁期のデータのみを含むため、前年より低い水準となっているが、漁期内での月別変動は例年と同様の範囲に収まっている。

全体として、スズキのCPUEは長期的にみて極端な減少や急激な上昇ではなく、資源状態は相対的に安定していると考えられる。今後も漁期(5~10月)に焦点を当てた継続的なモニタリングにより、資源動向の把握と年変動要因の分析精度向上が期待される。

なお、千葉県の「令和6(2024)年度沿岸重要水産資源評価」においても、スズキ資源の水準は中位、資源動向は横ばいと判定されている。同評価では、過去20年以上にわたる小型機船底びき網漁業の操業日誌から算出されたCPUE(1網当たりの漁獲量)を評価指標とし、最近5年間の資源動向に有意な増減が認められないことが示されている(図6)。本漁業における直近5年間のCPUE傾向もこの結果と概ね一致しており、地域的な資源状態の安定性を裏付けるものと考えられる。

環境保護区への影響

珊瑚礁、干潟、藻場は生物多様性の中心的ハビタットであり、水質浄化機能や産卵場・稚

仔魚の成育場として重要な役割を果たすことから、適切な保全が求められる。東京湾には盤洲干潟、三番瀬干潟、富津干潟などの大規模干潟や、富津岬・館山湾などにアマモ場が分布している。

本漁業(大傳丸・中仙丸)の操業位置は、海洋状況表示システム「海しる」を用いて以下の環境保全区域と照合した(別紙1、別紙2を参照):

- 生物多様性の観点から重要度の高い海域(EBSA)
- 国定公園区域
- 生物学的脆弱性評価(生物用脆弱評価)
- 鳥獣保護区・特別保護地区
- ウミガメ産卵地
- 鳥類重要生息地
- 干潟分布域
- 藻場(アマモ場・コアマモ場)

これらの比較分析の結果、操業域は主要な干潟、藻場、浅瀬などの高保全価値区域から十分に離れており、保全対象ハビタットへの直接的な影響が生じていないことが確認された。

さらに、千葉県海面漁業調整規則(第43条)では水深8m以浅での操業が禁止されており、漁業者はこれを順守している。浅海域の干潟・藻場・塩性湿地周辺で操業していないことは、電子記録によっても裏付けられている。これにより、アマモ場の損傷、三番瀬・盤洲・富津などの干潟生態系への接触、鳥類の採餌・休息場への攪乱といったリスクは回避されている。

なお、EBSA(生物多様性重要海域)の区画内に一部操業が含まれる場合があるが、EBSAの指定対象は干潟・浅瀬・沿岸域であり、実際の操業位置はその外側の沖合域に限定されている。したがって、EBSAで保全対象となっている生態系への影響は生じないと判断される。

以上より、本漁業の操業海域は東京湾内の重要な干潟・藻場・鳥類生息地と空間的に分離されており、環境保護区への影響は非常に低いと評価される。

ガイドラインの作成

持続可能漁業を遂行するためのガイドラインを「自主的資源管理協定」としてまとめ作成中である。

電子モニタリングデータの活用

千葉県総合水産センターと電子モニタリングで蓄積しているデータを千葉県の正式な資源評価などに活用するために、両船の標本船としてデータ提供することが決まった。

以上

5:引用文献

千葉県(2024):千葉県資源管理方針,

<https://www.pref.chiba.lg.jp/gyoshigen/documents/20240122kenhousin.pdf>

千葉県(2023a):千葉県 沿岸重要水産資源 令和6年度資源評価 スズキ(東京湾),

<https://www.pref.chiba.lg.jp/gyoshigen/sigenhyoka/documents/04-r6suzuki.pdf>

千葉県(2023b) : 千葉県 沿岸重要水産資源 令和6年度資源評価 コノシロ(東京湾),
<https://www.pref.chiba.lg.jp/gyoshigen/sigenhyoka/documents/02-r6konosiro.pdf>

千葉県(2023) : 千葉県における船橋市漁業協同組合の資源管理協定
https://www.pref.chiba.lg.jp/gyoshigen/shingikai/shigen-gyogyou/documents/02funa_basisikyotei.pdf

千葉県(2025) : 令和6年度 千葉県における「すずき東京湾海域」に係る資源管理協定の取組の効果の検証結果(中間)
<https://www.pref.chiba.lg.jp/gyoshigen/sigenhyoka/documents/04-suzuki.pdf>

令和6年度 千葉県における「このしろ東京湾海域」に係る資源管理協定の取組の効果の検証結果(中間)
<https://www.pref.chiba.lg.jp/gyoshigen/sigenhyoka/documents/03-konosiro.pdf>

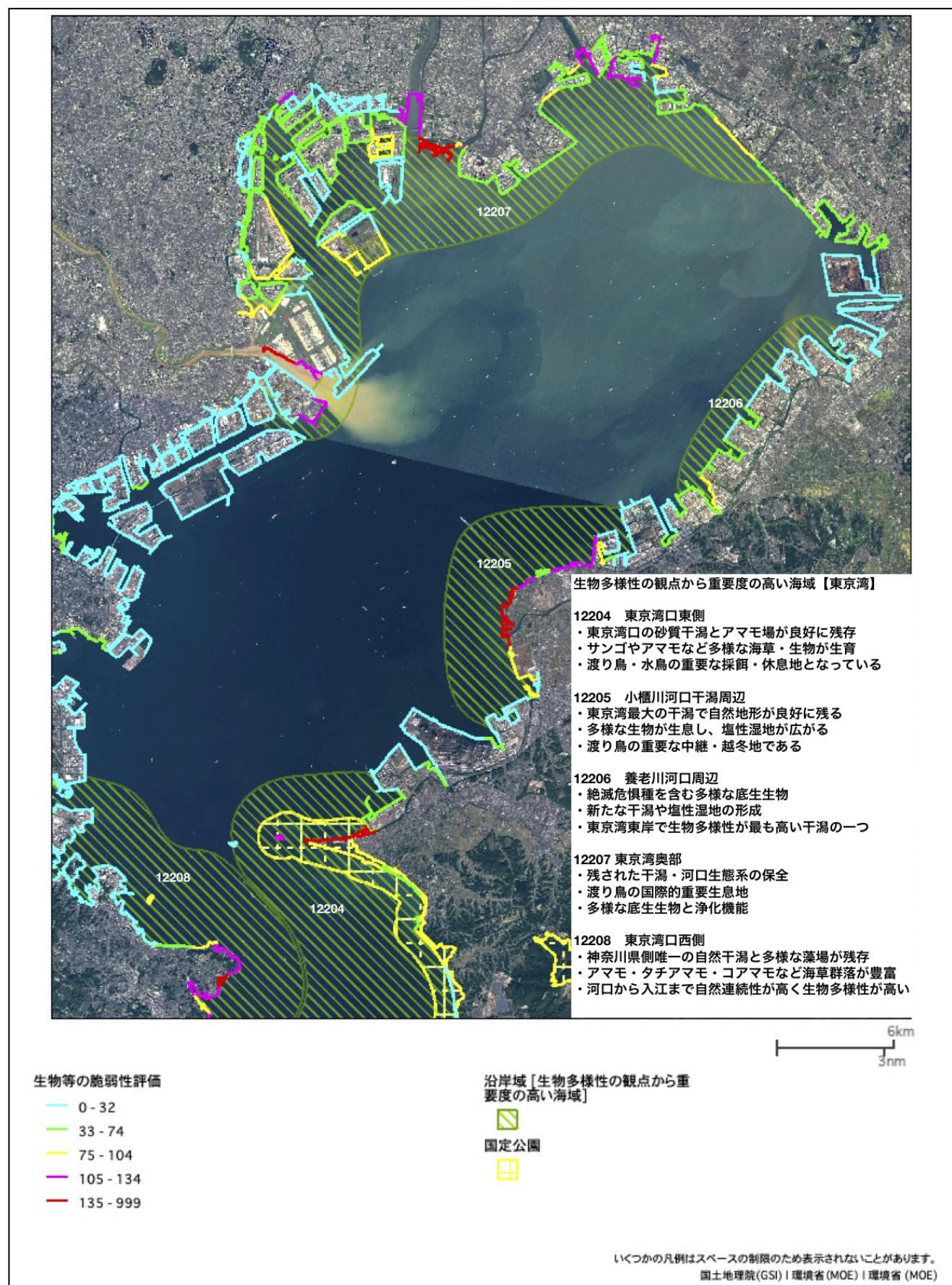
水産研究・教育機構(2024) 令和6(2024)年度資源評価状況報告書(スズキ太平洋中・南部)
https://abchan.fra.go.jp/wpt/wp-content/uploads/2025/03/report_2024_162.pdf

水産研究・教育機構(2024) 令和6(2024)年度資源評価状況報告書(コノシロ)
https://abchan.fra.go.jp/wpt/wp-content/uploads/2025/03/trends_2024_149.pdf

海洋状況表示システム「海しる」(2025) :

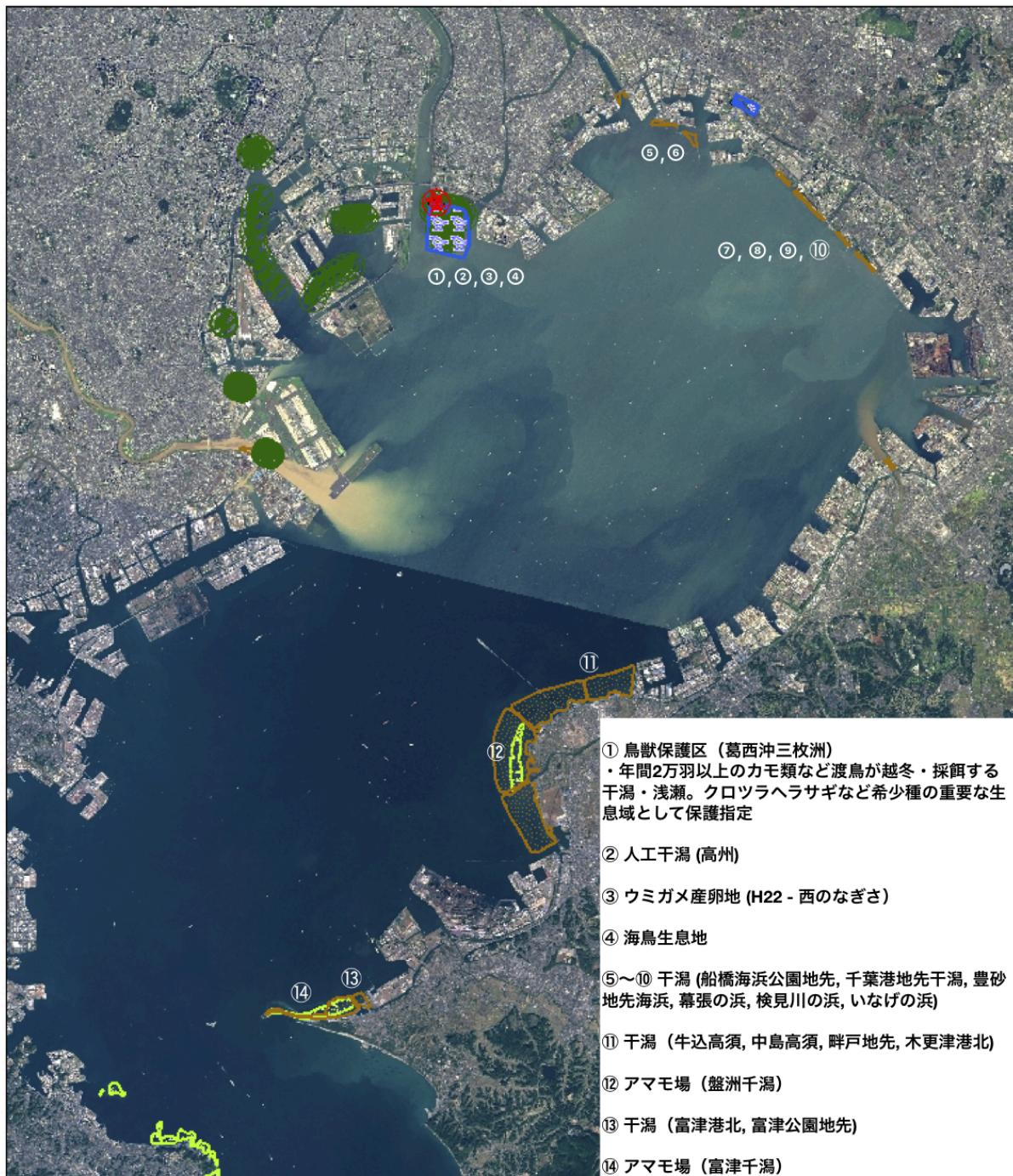
<https://www.msil.go.jp/msil/htm/topwindow.html>

別紙1: 海洋状況表示システム「海しる」東京湾(生物多様性の観点から重要度の高い海域、国定公園、生物等の脆弱性評価)



海洋状況表示システム「海しる」東京湾(生物多様性の観点から重要度の高い海域、国定公園、生物等の脆弱性評価)

別紙2: 海洋状況表示システム「海しる」東京湾(鳥獣保護区、干潟、藻場、鳥類生息地、ウミガメ産卵地)



ウミガメ産卵地



鳥獣保護区(国指定)

- 鳥獣保護区
- 特別保護地区
- 特別保護指定地域

鳥類生息地

干潟



藻場



いくつかの凡例はスペースの制限のため表示されないことがあります。
国土地理院(GSI) | 環境省(MOE) | 日本ウミガメ協議会

海洋状況表示システム「海しる」東京湾(鳥獣保護区、干潟、藻場、鳥類生息地、ウミガメ産卵地)